

特集

「テーマ型組織」と「地縁型組織」は、 いかに協働すべきか？

「ボランティア・市民活動シンポジウム2010」より

○コーディネーター

○パネリスト



やまうち あきこ
山内 明子 さん
日本生活協同組合連合会
執行役員 組織推進本部長

昭和58(1983)年、日本生活協同組合連合会へ入協。国際部部長、組合員活動部部長を経て、平成19(2007)年より組織推進本部本部長として、福祉介護事業、環境、組合員活動、食品の安全分野を担当。平成22(2010)年から現職。国の審議会委員や諸団体の役員も務める。



かすみ たかゆき
鹿住 貴之 さん
特定非営利活動法人
JUON(樹恩)NETWORK 事務局長

平成10(1998)年、特定非営利活動法人JUON(樹恩)NETWORKに事務局スタッフとして参画。平成11(1999)年3月より現職。東京ボランティア・市民活動センター「市民社会をつくる ボランティアフォーラム」実行委員長、森づくりフォーラム理事等、さまざまな市民活動に携わる。



さきやま すみこ
崎山 壽美子 さん
大阪府阪南市箱作校区福祉委員会
副委員長

昭和58(1983)年から現在に至るまで、障害者・高齢者などの領域で活動。平成22(2010)年度より阪南市ボランティアセンター運営委員長と社協理事に就任。地元の校区福祉委員会委員として、ひとり暮らしの高齢者支援活動やふれあいサロン活動等を実施している。



まつした のりこ
松下 典子 さん
特定非営利活動法人
地域福祉サポートちた 理事

平成3(1991)年に地域福祉ボランティアグループ「結びの会」と有償部門の「ゆいの会」を設立。平成14(2002)年3月、特定非営利活動法人地域福祉サポートちた代表理事に就任。平成22(2010)年5月から現職。地域福祉にかかわる人材育成、ネットワークづくりや協働の関係づくり、NPOの基盤づくりをしている。



<活動概要1>(テーマ型組織)

都市と農山漁村との 協働・交流を図る取り組み

特定非営利活動法人 樹恩ネットワーク 鹿住さん

「樹恩ネットワーク」は、平成10(1998)年に、大学生協同組合の呼び掛けによって設立した組織です。都市と農山漁村を結んで、主に過疎化が起きている問題について取り組んでいます。全国を6つの地域ブロック(北海道・東北、関東・甲信越、東海・北陸、関西・中国、四国・九州)に分けて、それぞれに1人ずついる理事を中心に、「世話人会」をつくって活動をすすめています。

事業としては、都市と農山漁村を結ぶ人材養成を目的とした「エコサバー検定」のほか、「森林の楽校」という森づ

くりの活動、あるいは「^{はたけ}田畑の楽校」という農家のお手伝いの活動、国産の間伐材を使った「^{がっこう}割り箸」の普及活動等がメインです。

「地縁型組織」との協働では、「森林の楽校」を発展させた、「森林ボランティア青年リーダー養成講座」がカギになっています。東京では11年前、関西では3年前からで、講座の卒業生たちが中心となって「地縁型組織」の方々と協力して活動しています。

また、昨年は、兵庫県で水害があり、佐用町では人が亡くなられて、かなり報道もされましたが、その東隣にある一宮町中坪という地域は、いまは合併して^{しそ}穴栗市になっています。その地域では、ソバを蒔くというプログラムを予定していたのですが、それどころではないということで、私たちのグループで災害復旧支援のお手伝いをしました。その活動をきっかけに、地域のみなさんからの信頼が大変深まりました。

<活動概要2> (地縁型組織)

NPOや市民活動団体と協働で 地域課題に向き合う

大阪府阪南市箱作校区福祉委員会 崎山さん

阪南市には、12の小校区があり、それぞれに小校区福祉委員会があります。その構成員は、自治会、民生児童委員協議会、婦人会、老人会、子ども会などの各種団体、学校関係者、主旨に賛同するボランティアたちです。

活動内容は、ひとり暮らしの高齢者の食事会、見守りの声掛け運動、「暮らしの安心ダイヤル」事業、小学校との世代間交流、あいさつ運動、「いきいき健康教室」、「介護予防体操教室」などです。

個人のボランティア活動としては、もう30年近くになりますが、高齢者施設での話し相手や、生け花とか手芸のお手伝い、障害者作業所のお手伝いに行ったり、地元では、自治会の部屋を借りて、「いきいきふれあいサロン」を開催しています。

また、阪南市社協の呼び掛けによって、私たちの「地縁型組織」のボランティアと、NPOや市民活動団体とが2年間の委員会で対話を重ね、そのなかから両者協働で、地域の子育て支援や、幼児とお年寄りの交流活動を行ってきました。

この委員会は平成22(2010)年3月で終わったのですが、このまま終わらせてしまうのはもったいないという声が上がって、本年4月から、みんなが活動したり、話し合ったり、情報交換をする拠点づくりや気軽に情報交換できる機会づくりが動き始めています。これから先は、少しずつでも発展させていきたいと思っています。

<活動概要3> (中間支援組織)

ボランティア・市民活動団体が集う ネットワーク組織

特定非営利活動法人 地域福祉サポートちた 松下さん

「地域福祉サポートちた」は、知多半島を5市5町、最南端のほうは活動団体がありませんので、実質的には5市4町ですが、約62万人の人口のなかにおける「中間支援組織」、特に福祉をテーマとしたNPO活動のネットワーク組織(56団体)です。

平成19(2007)年に、障害のある子のお母さんからの依頼をきっかけに、「知多地域成年後見センター」を立ち上げました。地域に住んでいる市民の「困った」を吸い上げて、その課題を、NPO同士が協議して、専門家、行政、当事者も

入れて、よく理解されていない成年後見に対し、どういった支援が必要か現場を通して取り組み、組織を立ち上げました。

また、「地縁型組織」との協働では、「NPO 現場バスツアー」を実施しています。これは、独自のプログラムとして、平成14(2002)年からスタートし、本年8月で100回目になります。これまでに約3,500人が、このバスツアーをご利用いただきました。地域の現場、NPOの現場を肌で感じとっていただく事業に、地域のみなさん、そして多くの組織のみなさんに出会いの場を提供することで、行政や「地縁型組織」の方々が、自分たちの地域を振り返って、どういう地域にしたらいいか、どういうしくみが必要なのか、どんなサービスがいるのかということを考える機会を提供しています。知多半島のNPOの現場に、一日4か所訪問して、そのリーダーの想い、コミュニティでのつながる様子などを、その場で体感、理解するという事業です。



協働の信頼関係を育むポイントについて

山内 鹿住さん、都市と農山漁村とを結ぶ場合、地元の方の信頼を得るために、何がポイントとなって、浅い関係から深い信頼関係をつくることができたのか、具体的な例があれば教えてください。また、同様に、松下さん、崎山さんからも、異なる組織の人たちとどのようにつながり、お互いの理解を深めてきたのか、経験を教えてください。

鹿住 都市と農山漁村とが交流するときには、そこに介在する「人」が、非常に重要だと思います。私たちは「テーマ型組織」の活動ということで、当たり前のことですが、行く側の「人」が真面目に向き合うことを大切にしています。そしてもう一つ、地元の受け入れ側の方々の「想い」も大切だと思っています。都市の人たちに「何かやってよ」ということだけでは、うまくいかないと感じています。

活動概要のなかで紹介した兵庫県宍粟市の中坪地域は、41世帯、139人しかいない集落で、都市に出やすい環境ということもあって、サラリーマンをやりながら農業もやっている家庭がほとんどです。比較的若い世代の方々と、自分たちが地域を守っていききたい、活性化したいという想いの人が多い地域です。

そういうなかで、それぞれの想いが一致したことに加え、災害への支援がきっかけで、一層信頼が深まったというところがあります。実は、災害の起こる3、4年から交流が続いており、毎年、一緒にやる活動というのは増えていました。最初は少なかったのですが、「顔」の見える関係になった人たちが何回も通っていると、互いに「もっとできるね」と言って、どんどん活動が広がってきました。ソバを蒔くことから交流が始まって、いまでは薪や炭をつくるために、森の手入れもさせてもらうようになっているように、一つ一つの活動の積み重ねも大切だと思います。

松下 私も、積み重ねが大事だと思います。課題を抱えて、その解決を模索している人たちと長い間、何回も会って、分かり合うプロセスがポイントだと思います。そして、互いの立場を尊重しながら、互いの得意分野をどう生かそうかという発想に展開させることが重要だと思います。

崎山 私が、阪南市に引っ越して来てから30年近くなのですが、ボランティア活動をしたと申し出た際、やはり最初は転入者ということでなかなかうまく打ち解けられませんでした。周囲からのお願いごとを断わらずに聞いたり、活動にも積極的に参加することで、徐々に良い関係に変わっていきました。いまでは、地域にどっぷりと浸かっているのですが、自分がそこに入りたいとか、打ち解けたいとかいう努力も必要ですし、相手が何を求めているのかということを読み取っていったことが、相手が私を受け入れてくれた要因だと思います。

山内 時間を重ねること、相手との対話を重ねること、経験を重ねること、信頼を勝ち得るということですね。

松下さん、「地域福祉サポートちた」には、たくさんのNPO法人が参加していますが、このようにたくさんのNPOができたのはどういった背景があったからですか。

松下 法人格をとる前の任意団体の段階で、15団体が結束して、この団体を立ち上げたわけですが、各現場を見たり、課題を抱えた地域の人たちが「地域福祉サポートちた」を訪れたり、あるいは研修事業に参加したり、いろいろなつながりから「私もやってみたい」「私もできるかしら」という相談もたくさんありました。

また、起業講座を3年間させていただきました。地域で何かをしたい人たちに対して、「こんな形でNPOの活動ができます」という講座です。そんなこともあり、最終的には市町にあるボランティア・市民活動の現場につながる人たちが増えてきて、そこから、また広がっていくというもあります。ですから、ここに参加している組織は、赤ちゃんからお年寄りまで、障害の問題もあれば、青少年の問題、さまざまな活動現場があります。

「あんなやり方をすればいい」という実態が地域にあり、いつでも見に行ける、聞けるといっても、ここまで広がってきた要因だと思います。

山内 時代の流れもあつたし、NPOをつくるということに対するみなさんの支援もあつたし、相乗効果もあつて、たくさんできていったということですか。

松下 そうですね。もう一つ、付け加えて言えば、知多地域には日本福祉大学があつて、若者たちの参加がたくさんあります。活動現場にボランティアの形で入り、ふるさとに帰ってやりたいということで参加している学生たちもたくさんいますので、インターンシップ的な役割も、それぞれの団体がしています。

互いの「違い」を、どう克服するか？

山内 協働関係をつくる時、乗り越えなければならないハードルの一つに、互いの「違い」を理解し、「違い」があるということをつかたうえで知り合い、信頼し合うということが重要だと思いますが、崎山さんは、「地縁型組織」の活動をされて

いて、「テーマ型組織」の方たちを会ったときに、違和感はありませんでしたか、そして、もしあつたならその気持ちはどのように変化したのかを教えてください。

崎山 阪南市社協のほうから、私たち「地縁型組織」と、専門的なNPO、市民活動団体とが、一つのテーブルについて話し合ったらどうかということで、「ボランティアセンター検討委員会」を開きましょうという提案がありまして、平成20(2008)年4月から22(2010)年の3月までの2年間、その間に7回ほど会議を開催しました。

メンバーは、私たち阪南市ボランティアセンターの運営委員と、校区福祉委員長、校区のボランティア・NPO法人、市民活動団体、主旨賛同者、学識経験者の方々でした。ボランティア・市民活動の活性化等をテーマにやろうとしました。

ところが、1回目の会議を開きますと、そこに集まってくれた方々が、阪南市ボランティアセンターの運営だけを議論する会なのか、何を目的に委員会が開かれるのか分からないと言うのです。NPOの方たちも、阪南市ボランティアセンターがどういう運営をすべきか分からないから、我々に助けを求めているのではないかというような感じで、「何の会や？」と言われました。逆に、私たちのほうは、「自分たちを助けてほしいという会ではない」ということで、話し合いは紛糾しました。

最初のうちはそういう言い合いがありましたので、3回目から名称を「ボランティア・市民活動検討委員会」に変え、ここでは何を議論するのか、これからどんなふうに進展させていけばよいのかということや、互いに思っていることを、みんなで話し合いました。

私たち阪南市ボランティアセンターのほうは、NPO法人がどういうことをなさっているのか、市民活動団体は専門的にどんなことをやっていらっしゃるのか、というようなことをあまり知らなかったので、そこに参加して下さっている方から、どういう組織で、どういう活動をしているというようなことを詳しく教えていただきました。

それによって、お互いを知り、話し合いができ、どんどん議論が弾んでいって、顔見知りになり、世間話みたいなものも、お茶を飲みながらできるような関係になってきました。そのなかから、自然な流れで校区福祉委員会とNPOとの共同実践が生まれました。地域の方からの「子育て中の親子の行き場所がほしい」という声を受けて両者が話し合い、校区福祉委員会が実施している高齢者茶話会を、子育て中の親子も参加できるようにして合同サロンに変え、子育て支援のNPOさんがみんなのできる手遊び等を披露してくれる、といったものです。

山内 鹿住さんはどうですか。

鹿住 都市から出かける私たちには若者が多いということ、受け入れ側の地域には年配の方が多いということで、生活環境から文化まで、いろいろと違うところがあると思います。

ですから、都市から行く場合には、「学び」というものが大きいですね。私にとっても、環境問題のことや、山村のこと、いまでも過疎化になっているか、ということも、すごく勉強になりました。

逆に、山村の方々も、それまで気がついていなかった自分たちの環境のよさだったり、自分たちがやっていることの意味を認識することがあります。例えば、山村の方が木を切るなどの



作業を、何でも簡単にやる姿を、学生が見て驚いたり、「かっこいい」と言ったりすることがあります。地元の人にとっては、それは当たり前すぎることであったのですが、そういう「よそ者」の視点というものが、地元の人たちにとっての「気づき」を生むということが大いにありますし、意味があると思います。

山内 「違い」が分かったら、発見があり、驚きがあり、そのことが都会から行く若者にもそうだし、地元の方たちにもあらためて「気づき」を生むという感じですかね。

協働における「中間支援組織」の重要性について

山内 松下さんにおたずねしたいのですが、「中間支援組織」として、異なる組織が出会う場をつくったり、語り合う時をつくる場合に、間に立って、そのことをコーディネートをする人たち、また、コーディネートをする組織が必ず必要だと思いますが、このことについては、どのように考えていらっしゃいますか。

松下 「中間支援組織」のような、つなぐ役割というのは、これまでの日本の社会になかったと思うのです。中間的に組織と組織をつなぐとか、活動団体、あるいは、個人をつなぐという役割は、たぶん縦割り行政のなかで必要はなかったということもあるのかと思うのです。でも、いまは、ネットワーク型でいろいろなテーマをもった動きが新しくたくさん出てきています。そのたくさん出てきている活動は「地縁型」ともつながらないと成果がでない。問題が解決できないことが多い。バラバラになっては、意味がないわけです。だから、同じ目標に向かう活動団体と情報共有や活動の連携をつなぐ役割として、コーディネーターがいると思うのです。

地域福祉コーディネーターとか、地域コーディネーター、プロデューサーとか、いろいろな言葉がありますが、その役割が明確化されていません。いま、私たちも、中間支援をしていて、それが大きな課題です。

いままで、その役割を、「中間支援組織」の私たちがしてきましたけれど、この中間の位置づけとして、きちんと仕事になるようにしないと、新しい動きというものが定着していかないように思うのです。そういう意味で、私たちは、「中間支援組織」の役割を、もう少し明確にできるような人材育成もすすめて考えています。

これから、つなぎ役の組織を確立しないことには、せっかく芽生えてきた市民のボランティア活動も、どこかで行き詰まっ

てしまう、あるいは、やりたいことが潰れてしまう。いま、知多半島を見ていて、そう思います。

山内 鹿住さんは、いまは活動を直接現地の方と実施されているようですが、いままでに、鹿住さんたちと現地の組織の間に入って両者の関係や活動が円滑にすすむよう助けてもらった組織はありましたか、また、そういった組織に期待することがあれば教えてください。

鹿住 「よそ者」と地元の人が交流する場合に、中坪地区の事例では、役場が間に入りました。「よそ者」が入っていても、信頼を担保する役割を担う存在がないと、うまくいかないと思います。

いま、ボランティアセンターとか、社会福祉協議会、環境の情報センターなどさまざまな「中間支援組織」はありますけれど、山村地域での私たちのような活動に専門特化して支援をする組織はなかなかありません。そのため、私たちのような組織の中で、事務局だったり、あるいは地域の「世話人会」が、実際に活動に参加する人や団体と地元をつなぐ中間支援組織のような役割を果たしていることもあります。今後は、既存の中間支援組織にもその役割を期待したいところです。

山内 また、阪南市では社会福祉協議会が「中間支援組織」として、そういったつなぎ役・つながる場づくりを仕掛けたという訳ですね。

より有効な協働のためのキーワードとは？

山内 協働していくということのテーマやキーポイントがいくつか出てきたと思います。最後に協働のポイントは何か、「テーマ型組織」と「地縁型組織」が繋がっていくときに、重要なキーワードについて、一言ずつお願いします。

鹿住 目的があって、協働をするわけなので、「想い」というか原点が大切で、そのために、どういう協働をするのかということだと思っています。最初の「想い」が大切だと思っています。

崎山 私は、とことん語り合うというのが、いちばん大切なことだと思っています。

松下 10年、20年先のビジョンをしっかりと、お互いのセクターが共有することだと思っています。

山内 私は、「勇気をもって対話を始めること」だと思っています。それが信頼につながり協働が育めると考えます。本日は、どうもありがとうございました。